

## 「種」の保存に警鐘！

上久堅の『甲斐犬の保存』を出版  
川手さん

他地域から人為的に持ち込まれた生物を外来種といい、それらが引き起こしている数々の問題を外来種問題という。近年の個人輸入

の活発化などもあつて、植物や動物、昆虫などの日本への流入は著しいものがあり、帰化植物のニセアカシアが河原を埋め尽くしているとか、やれ逃げ出したワニが繁殖していると、ブラックバスが日本在来種の魚を食べ尽くしそうだなどと、おもしろ可笑しくマスコミ

ミがとりあげる。しかし本当の問題はこうした外来種が日本在来種の「種」としての危機を招いていることだ。

空前のペットブームの中、日本在来種の犬も例外ではない。国の天然記念物にもなっている甲斐犬（かいけん）も交雑が進み純血種の維持が難しくなっているところに、経済優先のブリーダーの無秩序な繁殖や販売・飼育の方法にも一因がある。

このほど甲斐犬の愛犬家である上久堅の川手正秀さん（75歳）によって出版された『甲斐犬の保存』はそうした点にも鋭いメスを入れている。川手さんは2009年にも『天然記念物甲斐犬』（雑誌「狩猟界」2002年から07年まで、50回の寄稿を再編集したも

の）を出版し、警鐘を鳴らしているが、今回のその続編にあたる。

川手さんは元中学校教諭で、現在は農業を営んでいる。川手さんが甲斐犬の魅力に取り憑かれたのは売木村の中学校教諭時代の1960年代前半。川手さんの犬好きを知った教え子の保護者の猟師が、

子犬を譲ってくれたことによる。以来、優秀な猟犬の保存には狩猟が必要と考え、狩猟免許も取得して犬とともに猟に出るようになった。約40年にわたる7匹の甲斐犬との狩猟体験も交え、温かいまなざしで猟犬としての甲斐犬の素晴らしさを伝える一方で、最近のペットブームによる犬の値段の高騰、無秩序な交雑による甲斐犬の種としての崩壊が目につくようになってきた。川手さんは、2007年以降もそうした視点から、雑誌「狩猟界」に寄稿を続けてきた。本書は、前著以降の寄

稿を中心に1冊にまとめたもの。甲斐犬の飼育マナーや猟犬としての素質、訓練方法、血統書の読み方など、自身の体験を踏まえて細かく解説している。

川手さんは、自身が子どもだった戦時中に、毛皮の確保や食料難を理由に、純粋な血統の犬たちが捕獲され殺されたという悲劇や、そうした中でも家族で大事に育てた犬の思い出を持つている。「甲斐犬が生きてきた運命は、歴史の悲しみも物語っている。猟犬としての優れた血統を残していく大切さを伝えたい」と話した。

本書は四六判上製本160頁、定価2100円、南信州新聞社出版局刊。問い合わせは、電話0265・29・8568の川手さん。また、平安堂でも扱っている。（嶋）



出版された本